広島大学学校教育学部紀要，第Ⅰ部，第20巻（1998），151－159頁

ペスタロッチー研究の方法論に関する一考察

－影響史的方法を中心に－

鈴　木　　由美子

（1997年９月30日受理）

A Study on the Methodology to study Pestalozzi's Pedagogy

－Through the "wirkungsgeschichtlich" method－

Yumiko SUZUKI

The purpose of this study is to point out the merits and the demerits of the "wirkungsgeschichtlich" method in studying Pestalozzi's pedagogy. In this paper, especialy taking up the method of F. Osterwalder, try to distinguisch Pestalozzi's own work from the things carried out under the name of Pestalozzi.The result is as follows. The merits of the "wirkungsgeschichtlich" method are to make clear the relation between his pedagogy and historical facts in the 19th century. And the demerits are that the historical value of Pestalozzi's pedagogy is not so clear. It is our problem to search the method of the historical understanding of Pestalozzi.

Keywords：Pestalozzi, methodology, wirkungsgeschichte, ペスタロッチー, 方法論, 影響史的研究.

問題設定

本論の目的は、1980年代以降スイスにおいて生じているペスタロッチー研究の新しい動向を、とくに影響史的方法を中心にしながら分析し、そのペスタロッチー研究への寄与と問題点を指摘することにある。そのために本論では、チューリヒ大学主任助手、ペスタロッチーアーヌム研究協力者であり、"Neue Pestalozzi-Blätter"、"Neue Pestalozzi Studien" の編集者でもあるトレーラー(D. Tröhler)による「スイスにおけるペスタロッチー研究の主たる潮流とその傾向」[1] を中心にして、スイスにおける研究動向を明らかにするとともに、現在スイスで新しい傾向を形成しつつあるオスターヴァルダー(F.Osterwalder) の影響史的研究[2] の方法論を批判的に検討することにする。

1.スイスにおけるペスタロッチー研究の動向

1996年に開催されたペスタロッチー生誕 250年祭は、「ペスタロッチーは神話(Mythos)か現実(Realität)か」を基本テーマとして開催された[3]。

ここで目的とされているのは、ペスタロッチーの業績と活動に光りをあてることであるが、それはけっしてペスタロッチーを崇拝すべき対象として神聖視することではない。そうではなくて、150年にわたる偶像化からペスタロッチーを救いだし、彼の思想と業績とを歴史に照らして正しく理解することである[4]。

トレーラーによれば、ペスタロッチーの没後まもなく生じた偶像化は、「ペスタロッチーに関する学問的哲学的研究と、彼の偶像化ならびに道具としての利用[5]」との境界を曖昧なものにしてきた。ペスタロッチー研究が学問的哲学的研究の対象となったのは、比較的新しく、20世紀にはいってからである。ペスタロッチー研究は、19世紀においては主としてアカデミックではない国民学校教育学の分野でおこなわれてきた。20世紀になって大学の教育学専門分野の講座担当教授によっておこなわれるようになったのである[6]。こうした歴史的背景をふまえて、トレーラーは、スイス国

内でのペスタロッチー受容を、次の3点によって特徴づけている[7]。まず第1に、戦中・戦後を除いて、19世紀から現在にいたるまで、その内容がペスタロッチーの人柄と教育学に集中している点、第2に、ペスタロッチーの死後まもなく生じたペスタロッチーの偶像化を受容している点、第3に、最近になって受容史的または影響史的な研究がおこなわれている点である。

とくに第3点についていえば、トレーラーは1980年代にペスタロッチー研究にひとつの転回があったことを認めている。その転回とは、「ペスタロッチーを無条件に賛美する時代は終わったということ[8]」である。それによって、「ペスタロッチーの人生と業績とを理解する際に、政治的、社会的、経済的、哲学的かつ宗教的神学的文脈を考慮にいれること—そしてそれとともにペスタロッチーの影響史を批判的に考察する[9]」必要性が指摘された。こうした転回とともに、ペスタロッチーを新たに解釈する可能性が生じているとトレーラーは指摘する。その方向性をトレーラーにしたがって分類すると、次の8点に示される。

まず第1に、マルチンによる詳細な影響史的研究(1986)[10]があげられる。これは19世紀のバーゼルランドシュタット州におけるペスタロッチーの遺産を研究したものである。第2に、1987年にベルン大学で「ペスタロッチーの遺産ーペスタロッチーの崇拝者からの擁護ー」というタイトルで開催された国際シンポジウム[11]があげられる。これは、ペスタロッチー研究における転回のはじまりと位置づけられている。

第3に、1988年に第1巻が公刊されたシュタッドラー(P.Stadler)によるペスタロッチー伝があげられる。第2巻は1993年に公刊された[12]。この関連で、オスターヴァルダーによる19世紀におけるペスタロッチーの影響史に関する研究[13]、ならびにヴィンター(D.Winter)によるスイスにおけるペスタロッチー祭の歴史(1846、1896、1927、1946)に関する労作があげられる[14]。

第4に、ペスタロッチーアーヌムの新しい研究機関紙、"Neue Pestalozzi-Blätter" の創刊(1995年)[15]があげられる。

第5に、批判版全集の完成があげられる。1927年以来続けられてきた批判版全集の刊行を、著作シリーズ、書簡シリーズ、新シリーズ(ペスタロッチーあての書簡を集めたもの)という3つのシリーズにおいて完成する研究プロジェクトの発足[16]である。とくにペスタロッチーあての書簡を公刊することの意義は、そこに影響史的な問題設定が示されている点にある。つまり、「ペスタロッチー研究の共通の歴史においてかなりしばしば確認されるか、少なくとも潜在的に存在した独善的な傾向が、他の教育学的方向性との比較において、そして政治的、社会的かつ経済的な文脈との関係において、通信相手を知ることによって、相対化されるという点、さらに公刊以来、ペスタロッチー研究においてほとんど考慮されてこなかったペスタロッチーの書簡の組み入れが促進されるという点[17]」があげられる。これにより、ここ10年来ずっとおこなわれてきた文脈的ー影響史的研究が、新たな刺激を受けることが予想されるのである[18]。

第6に、"Neue Pestalozzi-Studien" の発刊[19]があげられる。とくに注目されるのは、第3巻において19世紀初頭におけるドイツ、とりわけブレーメンとチューリンゲンでのペスタロッチー受容に関する事実史的かつ理念史的研究が、テーマとして取り上げられている点である。

第7に、1996年にチューリヒ大学でおこなわれた学術シンポジウムがあげられる。このシンポジウムは、ここ数年のペスタロッチー研究の傾向性を反映して、ペスタロッチーについての影響史的観点が中心であった。このシンポジウムの基本的な目的は、「増加するペスタロッチーの著作を学問的な議論において結びつけること[20]」にあった。その際、19世紀かあるいは20世紀におけるペスタロッチーの影響について議論されるだけでなく、また18世紀における一般的な改革運動との関連で、文脈的にペスタロッチーが解釈されなければならないとされている[21]。

第8に、ドイツ語圏でのペスタロッチー研究に関するふたつの成果、すなわち、批判版著作全集ならびに書簡全集の索引版(2巻)の第1巻の発刊と、ペスタロッチーのCD-ROM[22]の発刊があげられる。

これらの傾向性において顕著なことは、1980年代以降生じている影響史的研究の流れがペスタロッチー研究に大きなインパクトを与えていることである。トレーラーは、「とりわけ影響史的な研究とともに、いまやペスタロッチーならびにペスタ

ロッチーの著作への新しい道すじが可能になっている[23]」と評価している。彼は、影響史的研究の成果を、「ペスタロッチーの人物像もしくは業績を理解するための、存在論的かつ研究方法的前提条件[24]」である点にみているのである。

そこで本論では、『ペスタロッチー—教育的崇拝 Pestalozzi - ein pädagogischer Kult,1996』の著者であり、影響史的方法によるペスタロッチー研究において重要な役割を果たしているオスターヴァルダーによる影響史的方法に焦点づけて、彼による影響史的研究のペスタロッチー研究への寄与と問題について検討することにする。

2．影響史的視点からみたペスタロッチー理解

(1) オスターヴァルダーによるシュタッドラー批判

先に述べたスイスにおけるペスタロッチー研究の新しい方向性のなかで、オスターヴァルダーに先行する研究として、シュタッドラーによる『ペスタロッチー伝』をあげた。シュタッドラーは歴史家であるとともに著名なペスタロッチー研究者であるが、彼はペスタロッチー生誕 250年記念式典における講演のなかで、ペスタロッチー理解の方法について次のような視点を示した。彼は、数百年間にわたるペスタロッチーの偶像化への批判から始め、ペスタロッチー像が、シンボリックな像として存在し続けていることは、ペスタロッチーの業績を評価する際にマイナスの効果をもたらしているとした[25]。彼は、ペスタロッチーを偶像化するのではなく、ペスタロッチーの理論と実践を吟味し、現在に何を残し、何を捨て去るのか、このことがまず研究されねばならないとした[26]。

シュタッドラーは、講演のなかで、ペスタロッチーを理解する際に、彼が生きた時代の政治的経済的な前提条件、アンシャン・レジーム、啓蒙主義、フランス革命、工業化等を示し、そうした政治的経済的条件との関連においてペスタロッチーの著作を検討する試みをおこなった[27]。たとえば青年期においては、ペスタロッチーが多くの歴史的事件に積極的に関与するとともに、多くの失敗を甘受せざるをえなかった点を明らかにしている。また、生涯にわたってペスタロッチーが、現実感覚の欠乏と過大な自己評価とのギャップに苦しんだという人間的弱さと、失敗を成功に転換する力をもっていたという生命力の強さとが同時に示され、崇拝の対象ではなく、現実に生きた人間としてペスタロッチーを理解する方法がとられている。こうした方法を、トレーラーは「批判的－理解的分析 kritisch-verständnisvolle Analyse[28]」とよんでいる。

トレーラーによれば、シュタッドラーの批判的－理解的分析方法は、彼の著書『ペスタロッチー伝』に示されている。彼はこの著作のなかで、ペスタロッチーを「批判的－理解的分析」によって、事実史の文脈のなかで記述しようと試み、それによって「ペスタロッチーへの新しい道すじのための土壌を建設的に準備した[29]」。彼は、膨大な量の歴史的データファイルをペスタロッチーとの関連において叙述するとともに、そこからペスタロッチーを「弱さと矛盾にもとづいて判断すること[30]」の可能性を導きだしている。

オスターヴァルダーは、この著作をラングの指摘以来論議されてきた[31]、政治的側面からのペスタロッチー研究の集大成として評価しながらも、そこに残る方法論上の問題を指摘している[32]。

オスターヴァルダーによれば影響史においては、ペスタロッチー固有の業績が何であるかということと、ペスタロッチーの影響が何であるかということとは、区別されなければならない。彼は、これまでのペスタロッチー研究において、「ペスタロッチーの業績と彼の業績とよばれているものとの間に、緊張に満ちた、あるいはそれどころか矛盾した関係[33]」が存在していることを指摘し、両者を厳密に区別することの必要性を指摘している。この観点からみたとき、シュタッドラーの方法論にも、これまでのペスタロッチー研究と同様の問題が残っていることを指摘している。オスターヴァルダーによれば、シュタッドラーは、『ペスタロッチー伝』の結論部分において、ペスタロッチー自身が彼固有の業績を残していることを認めつつ、他方、その業績は今日的価値という点でも評価されうると述べているのである[34]。オスターヴァルダーは、ゲーテやカントが文学史上、哲学史上に果たした役割という点で評価され、その観点で、彼らの業績の「古典的完成Klassizität」と「連-続性 Kontinuität」とが示されているのに対し、ペスタロッチーにおいてはその区別が曖昧であるという[35]。150年以上繰り返されてきた、「ペスタ

ロッチーは近代教育学を基礎づけた」という命題さえ、まだ教育学史上において厳密に論証されているわけではないのである[36]。オスターヴァルダーはペスタロッチー研究に存在するこのような問題性に着目し、ペスタロッチーの業績が何であるかということと、ペスタロッチーの名において何がおこなわれているのかという点を、厳密に区別することの必要性を指摘している。オスターヴァルダーはこの観点から、ペスタロッチーの偶像化がおこなわれたプロセスを、政治的偶像化と教育学的偶像化という視点において分析している。

(2) オスターヴァルダーによるペスタロッチー理解

①リベラル民主主義に対するパターナルな国家観

オスターヴァルダーによれば、ペスタロッチーが『リーンハルトとゲルトルート Lienhard und Gertrud,1781-87 』を公刊した時代は、スイスにおいてはアンシャン・レジームの終わりに位置している。「それは近代化への社会的転換期であるだけでなく、また19世紀における近代的、自由主義的かつ民主主義的なスイスを規定するコンセプトを作り上げた時期でもある[37]」。こうした時代についてペスタロッチーは、『リーンハルトとゲルトルート』のなかで、国家権力が日常的な社会生活からかけはなれてきたこと、工業化にともなって社会的諸関係が不安定かつ無拘束になりつつあったこと、雑誌や小説、居酒屋での会話などによって情報交換のネットが広がり、学校と教会が伝統的な地位を失ったこと、さらに古くからの実体的法関係が社会に平等に適用される形式的な法律にとってかわられたことを指摘している。以上のような実態把握によってペスタロッチーがおこなった提案は、しかし、スイスにおける近代化の貫徹、多元的社会ならびにリベラル民主主義の形成から遠く離れていたと、オスターヴァルダーは指摘する[38]。

ペスタロッチーにおいては、「教育と政治は、著しく緊密に総合に結合させられている[39]」。具体的にいえば、ペスタロッチーの理論においては「国家は、教育を強く居間に結びつけることによって改革され、居間は、革新された国家の教育的コントロールを受けることによって改革される[40]」。オスターヴァルダーは、ペスタロッチーにとって「革新され、権力的であるが、また愛に満ちた、父なる教育者としての国家のコンセプト[41]」が重要であったと捉え、この意味でペスタロッチーの国家観のパターナルな性格を指摘している[42]。

オスターヴァルダーによれば、この当時スイスのリベラル民主主義は、こうしたペスタロッチーの見解とは全く異なる方向に進んでいた。彼によれば、「発生した様々な、比較的独立した形で相互に成り立っている社会生活の領域は、まさしく多元論(Pluralismus) ならびに民主主義の基礎になる。その際重要なことは、制限のないそして究極的にコントロールされることのない公共体であり、それに対しすべての市民が法的に平等な存在として参加できるということである[43]」。こうした観点からオスターヴァルダーは、ペスタロッチーのパターナルな改革論は一部の立憲君主国には受け入れられたが、大部分の国家にはもはや受け入れられないものだったと結論づけている。

②メトーデの無効性から生じた有効性

次に、オスターヴァルダーは、19世紀においてペスタロッチーのメトーデが受容された理由として以下の点をあげている。すなわち、ジャコバン派の恐怖政治ならびにその影響による社会の再教育への批判として、ペスタロッチーのいう個人にもとづく教育というコンセプトが受容されたという点をあげている。「情操に、すなわち純粋な内面性に固く結びつけられた[44]」教育が求められたのである。

ペスタロッチーは『メトーデ Methode,1800』のなかで、「教育法則を見つけなければならないと述べているが、このことは同時にメトーデで人間の内的諸力を形成することを通して、メトーデをすべての学問、すべての職業ならびに個々人の道徳的向上に適用することでもある[45]」。このことは、教育政策者にいくつかの期待をもたらした。それはまず第1に、家庭教育の向上による民衆学校の短期化であり、第2に、教員養成の簡易化である。これらにより学校改革の財政負担が軽減されると、教育政策者は期待したのである。

ただしペスタロッチーのメトーデは、実用的面ではほとんど機能しなかったとオスターヴァルダーは指摘する。ペスタロッチーが提案した「思考、行動ならびに愛の訓練」は、まもなく形式主義へ

と堕し、「学問的にも職業的にも道徳的にも何ら特記すべき成果を示さなかった[46]」。また「ペスタロッチーのイヴェルドン学園は、短期間とはいえ、全ヨーロッパの教育学上有名な人々の巡礼の地であったが、困窮の結果、その門を閉めなければならなかったのである[47]。」

オスターヴァルダーによれば、「メトーデは実用的な面においてだけでなく、構想の面においても、近代学校にとっては失敗作であった」。彼によれば、「近代学校は、すべての市民に、公的な生活への入口を平等に形成すべきである」。しかし「ペスタロッチーの人間教育は、貧民と裕福な人々とが分断された学校を構想している。その統一性は、ただメトーデそれ自体においてのみ存在するのである[48]」。それに加えて、「新しい国家の学校は、個人のプライヴァシィ、宗教、信条の場を確保するために、公的生活というテーマに限定されている」。これに対し「ペスタロッチーはメトーデを、まさにメトーデが、ごまかしのない完全なる全体性における人間を、教育的に把握するという点において称賛している[49]。」

公的学校における教育が、公的生活に関する内容に限定されている以上、ペスタロッチーのいうような私的生活の内容を公的学校にもちこむことはできない。では、ペスタロッチーは否定されたかというとそうではない。むしろ逆であった。オスターヴァルダーによれば、「公的学校の輪郭ならびに公共性からくるその制約性が明らかになればなるほど、そしてペスタロッチーの、具体的ではあるが役に立たない、学校への提案が忘れ去られれば忘れ去られるほど、よりいっそう無制限に、メーデの要求それ自体が、何度も繰り返されるが決して解決されることのない、リベラルな教育施設に対する批判と警告の役割を果たすようになったのである[50]」。こうしてペスタロッチーのメトーデは、その現実的無効性のゆえに理想的有効性をもちえたとオスターヴァルダーは指摘している。

3.ペスタロッチーの偶像化のプロセス
—崇拝の対象としてのペスタロッチー像の形成—

(1) 政治的教育的英雄としてのペスタロッチー像の形成

以上のように、ペスタロッチーが提案した社会組織論も教育理論も、当時においてすでに時代遅れのものであったとオスターヴァルダーは指摘する。「それに対し残ったのは、ひとりの人間である。彼は、時代の期待を、非常に単純ではあるがすべてを包括するような解決策に結びつけ、偉大な名声を獲得したのである[51]」。ここからペスタロッチーは、19世紀において二つの側面で記憶に残る人物となった。それは第1に政治的側面であり、第2に教育的側面である。

ヘルヴェーチア協会の1827年の年次集会において、ペスタロッチーへの印象深い追悼文が読み上げられた[52]。オスターヴァルダーはこの追悼文が寄与した点として、次の点をあげている。それは、「ペスタロッチーの生涯と人となりが——彼の業績ではなく——、リベラルなヘルヴェーチア共和国の歴史ならびにリベラルな政治の発展や求められたスイス的な中央集権国家とみごとに結合されている[53]」点である。「この追悼文のなかで、ペスタロッチーは結局ヴィンケルリートとならんで台座の上にあげられ、それとともに国家や教育に関する彼のコンセプトのすべてから、解き放たれたのである[54]」。「この意味においてペスタロッチーは、彼の業績にもかかわらず、まったく政治的シンボルのひとつとなった[55]」と、オスターヴァルダーは指摘する。

次に教育的な側面についてであるが、「教育的英雄としてのペスタロッチーは、スイスにおいてそう簡単に価値を認められたわけではない。近代教育制度をうちたてたリベラルな学校教師たちは、ほとんど例外なく、イヴェルドン学園のかつての教師たちの小グループにみられるペスタロッチー主義に対して反発していた[56]」。彼らは、現実的には無効であるペスタロッチーのメトーデを学校から排除するだけでなく、ペスタロッチー主義者からの学校批判に対して新しい学校を守らなければならなかった。公的な制約のある新しい学校は、宗教を分離していたし、全体的かつ内的な人間性を包括してもいなかった。理念的にそれらを可能にしていた「メトーデ」は、新しい学校に対するアンチ・テーゼとして存在したのである。

このような状況のなかで、ペスタロッチーのメトーデは、ドイツから逆輸入される形でスイスにはいった。ディースターヴェーク(F.A.W.Diesterweg)によるペスタロッチーの評価と教育ジャーナリズムの発達にともなって、「教育的英雄とし

てスイスに戻った[57]」のである。これは「まったくリベラルな学校政策者ならびに教育学者の意志に反することであった[58]」。そうしたスイスの時代思潮とは別の次元で、教育的英雄としてのペスタロッチー像が形成されたのである。

(2) 崇拝の対象としてのペスタロッチー像の形成

オスターヴァルダーによれば、「ペスタロッチーは、歴史的な教育者像とともに、一定の、少数ではあるが、強い、救済者として刻印される一般的な特徴を共通にもっている。その特徴とは、ほとんどがペスタロッチーによる無数の自己描写に由来していることであり、また歴史的な吟味がなされていないということである[59]」。それゆえ、ペスタロッチーを崇拝しようとする人々は、歴史的吟味をすることなく、ペスタロッチーに賛辞を与え、敬意を表することができる。それぞれの「思うがままに形づくられたペスタロッチーが祝われたのである[60]」。ペスタロッチーの「内的な尊敬すべき情操の全体すなわち善性」に価値を認めることで、ペスタロッチー祭への参加者に「謙虚な内省」を要求するとともに、「祝典を開催した、宗教的、社会的かつ文化的に不統一なスイス国民に、統一的な、統一化するような市民的宗教が渡されたのである[61]。」

スイスはペスタロッチー祭を、国家的祝典である以上に、教育的に心情的な統一をもたらすものにしなければならなかった[62]。1891年の最初の連邦の祝典は、シュヴィーツにおける小規模な名士連の祝典において、次のことを合意した。すなわち、イヴェルドンで同年に行うペスタロッチー像の除幕式を、うやうやしい国民的祝典にする一方で、SGG が直接連邦政府に依頼して、その除幕式にほとんどのカントン政府から援助させるとともに、ペスタロッチーを近代スイスの公的な英雄に指名し、市民的な英雄史を新たに作らせたのである[63]。

スイスの近代化は、もともと存在したカントンの自治をいったん中央集権化するが、それへの反発とともに、自治権を強化した形でのカントン間の平等が保証され、ゆるやかな連合としての国家を形成するという方向で進んだ。それゆえ、カントン間の結合力が弱まり、それとともに個人間の結合力も弱まった。近代化の必然的な結果である紐帯の弱まりは、国家の弱体化につながりかねない。それを恐れたスイス政府は、国民の統合の象徴を求めた。それがペスタロッチーだったのである。

結　論

以上、オスターヴァルダーによって示されたペスタロッチーの偶像化の歴史的プロセスをみてきた。オスターヴァルダーは、ペスタロッチーの政治思想や教育学理論を彼が生きた時代において相対的に検討し、ペスタロッチーの時代においてさえ、これらがすでに時代おくれのものであったことを指摘する。オスターヴァルダーはペスタロッチーのメトーデが当時において注目を集めたのは、それが現実の教育問題の解決に有効であったからではなく、むしろ現実的に無効であったがゆえに、かえってメトーデの理想化を促し、現実の教育問題に対するアンチ・テーゼの役割を果たしたからであるというのである。

オスターヴァルダーによれば、ペスタロッチーの偶像化は、まず政治的側面において、つづいて教育学的側面においておこなわれた。1827年のヘルヴェーチア協会年次集会において述べられたペスタロッチーへの追悼文のなかで、ペスタロッチーの生涯と人となりが、リベラルなヘルヴェーチア協会の歴史ならびに政治的発展と結合されており、ペスタロッチーは結局ヴィンケルリートとならんで台座の上にあげられ、まったく政治的シンボルのひとつとなったのである。教育的偶像化はやや遅れ、ドイツから逆輸入する形でおこなわれた。ディースターヴェークによるドイツでの偶像化が、ジャーナリズムの発達によってスイスにもたらされ、ペスタロッチーは教育的英雄としてスイスに戻ったのである。

政治的教育的偶像化は、1896年の生誕 150年祭において崇拝としてのペスタロッチー像の形成をもたらした。崇拝の対象としての人間像は、ほとんどが自己描写によって作られたものであり、そこに歴史的な吟味は必要とされない。思うがままにつくられたペスタロッチーが多様な人々の崇拝の対象とされ、それはスイス国民の統合の象徴となったのである。1880年代からリベラル民主主義的な手続きによる統合力への信頼が弱まってきたことへの懸念もあり、スイス政府は1891年におこ

なわれたイヴェルドンのペスタロッチー像の除幕式において、ペスタロッチーを近代スイスの公的な英雄に指名し、市民的な英雄史を新たに作らせたのである。

このようにペスタロッチーが偶像化された歴史的事実を丹念におうことにより、オスターヴァルダーは、ペスタロッチーの偶像化が推進されたのは、スイスの近代デモクラシーの結合力の強さによるものであり、ペスタロッチーの業績とは無関係であることを指摘しているのである。

こうした観点について、ペスタロッチー研究への寄与という点からみれば、これまでのペスタロッチー研究に存在した「英雄」ペスタロッチーの視点がきりとられ、歴史的批判的に吟味されたペスタロッチーの位置づけがなされている点があげられる。その結果、政治的にも教育学的にもペスタロッチーの歴史的意義は認められないこと、さらに歴史的意義のなさが逆に時代に対するアンチ・テーゼとなり、ペスタロッチー像が形成されたことが明らかにされている。これにより、オスターヴァルダーの最初の問題提起、すなわちペスタロッチーが何であるかということと、ペスタロッチーの影響が何であるかということとの区別という問題提起に対し、ペスタロッチーの影響とペスタロッチーが何であるかということには関連性がないことが示されたといえよう。

ただここで注目したいのは、偶像化されたペスタロッチー像が、ペスタロッチー自身の業績とは無関係のものであったにせよ、そうした象徴的像をスイスの近代化が必要とした点である。その統合の象徴とは、宗教なのか、宗教にかわる何かなのか、あるいは統合の象徴を求めるのは前近代の名残であって、近代以降はもはや必要とはされないのか、現代の教育学がかかえる大きな課題である。これに対し、オスターヴァルダーが、スイスがその近代化の過程において、キリストにかわる英雄として教育者であるペスタロッチーを必要としたことを指摘したことは、重要なことである。ペスタロッチーを偶像化から救うために、歴史的批判的吟味が必要なのか、それとも英雄が必要とされない社会が必要なのか、重要な問題提起であるといえよう。

さて、オスターヴァルダーの問題はまさにこの点にかかわって提出される。前述したように、オスターヴァルダーは、シュタッドラーの方法論にペスタロッチーをふたたび偶像化し、新しい文脈のなかでフィクションを作りだす危険性があることを示唆している。では、オスターヴァルダーの方法論はどうであるか。シュタッドラーがいみじくも指摘したように、「ペスタロッチーを神話におとしめるものは、ペスタロッチーを見誤るであろう[64]」。オスターヴァルダーは、丹念に事実史を追うことによって、偶像化の歴史的文脈を明らかにしているが、その歴史的意味づけの解明には不十分な点が残る。スイスの近代化が必要とした偶像があるとして、それがなぜペスタロッチーでなくてはならなかったのか、またなぜペスタロッチーで成功したのか、その歴史的意味づけがなされなければ、「ペスタロッチーが偶像化された」という新たな物語づくりで終わってしまうのではないだろうか。

こうした問題を解消するためのペスタロッチー研究の方法論の吟味は、いまはじまったところである。オスターヴァルダーの指摘が貢献しているのは、ペスタロッチーの偶像化が教育学的文脈だけではなく、政治的文脈においてもおこなわれた点、とくに後者において重要な意味をもっている点の指摘にある。この政治的意味の吟味、すなわち近代は人間結合のために象徴的像を必要とするのかどうかという点の吟味は、ペスタロッチー研究を超えて重要な課題をわたしたちに提起しているといえよう。

［注］

(1)Daniel Tröhler : Hauptströmungen und Tendenzen der Schweizer Pestalozzi-Forschung(in:Pädagogische Rundschau,1996,1-2).

(2)Fritz Osterwalder:Pestalozzi-Die Wirkung der Wirkunglosigkeit(in:Schweizer Monatshefte,Zürich,1996,3).

(3)Vgl. Pestalozzi Gedenkjahr 1996 Programm, Pestalozzianum Zürich.拙稿「ペスタロッチー研究の新たなる地平－ペスタロッチー生誕 250 年祭から－」（ 日本ペスタロッチー・フレーベル学会編『人間教育の探究』第８号，1996年，所収）参照。

(4)同前書，60ページ。

(5)Tröhler,a.a.O.,S.67-68.

(6)Ebenda,S.59.
(7)Ebenda,S.60.
(8)Ebenda.
(9)Ebenda.
(10)マルチンの業績としては、"Johann Heinrich Pestalozzi und die alte Landschaft Basel, Liestal,1986","Johann Jakob Kettger und Johann Heinrich Pestalozzi,Liestal,1991"があげられる。影響史的視点からの研究である(Vgl.Tröhler,a.a.O.,S.70)。
(11)ベルン大学で開催されたシンポジウムの内容は、"Johannes Grunz-Stoll(Hrsg.):Pestalozzis Erbe-Verteidigung gegen seine Verehrer, Bad Heilbrunn,1987" 参照。
(12)Peter Stadler : Pestalozzi-Geschihitliche Biographie,1.Teil,Zürich,1988,2.Teil,Zürich, 1993. このなかでシュタッドラーは、「伝記に感動するだけの時代が過ぎ去ったことは、喜ばしいことである」と述べている(Vgl.Tröhler,a.a.O.,S.73)。
(13)この業績の結果として、1994年6月にベルン大学で、「歴史的文脈からみたペスタロッチー」と題する小規模なシンポジウムが開催された。このシンポジウムでは、ペスタロッチーの歴史的文脈に関する研究報告とならんで、文脈化の際の方法的問題について論争的な議論がおこなわれた (Vgl.Tröhler,a.a.O.,S.73)。
(14)Daniel Winter : Pestalozzi-Ein Fest für die Nation,Diss.Uni Zürich,1995.
(15)Tröhler の編集によって、ペスタロッチーアーヌムから1995年に発刊された。「編集の意図にふさわしく、この雑誌は、情報提供ならびに討論の場として、国際的なペスタロッチー研究に貢献し、過去の機関紙とは反対に、討論的性格に重点をおいている」(Vgl.Tröhler,a.a.O.,S.67)。
(16)トレーラーは、批判版全集の公刊を、「ある意味では、今日優勢な影響史ならびに文脈化へと方向づけられた研究に対するもの」と位置づけている。ちなみに今後公刊される批判版全集の内容は、以下のとおりである。「批判版著作集29巻において、後になって見つかった、1790年から1826年にかけて執筆された約30本の小論文が、そして批判版書簡集第14巻において、後になって現れたほとんど 190通の書簡が公刊される。一方、批判版全集第17巻Bには、長く待ち望まれ、しかもその内容によって高く評価されていた『ゲスナーへの手紙』が収録される」。「1996年から1999年の間に、1950年ころになお保持されていたペスタロッチーあての書簡が出版される」(Vgl.Tröhler,a.a.O.,S.67)。
(17)Tröhler,a.a.O.,S.67.
(18)Ebenda.
(19)第1巻には、ペスタロッチーの妻、アンナ・ペスタロッチー- シュルテスの未公表の日記が、第2巻には、ペスタロッチーの著作における宗教と哲学についての体系的な問題に関する研究、ならびに1977年から1992年までのペスタロッチー文献目録が収録されている (Vgl.Tröhler,a.a.O.,S.67)。
(20)Vgl.Tröhler,a.a.O.,S.67.
(21)Ebenda,S.68.
(22)L. Friedrich, S. Springer : Johann Heinrich Pestalozzi:Sämtliche Werke uud Briefe-Kritische Ausgabe:Registerband I, Zürich,1994., L.Friedrich,S.Springer:Johann Heinrich Pestalozzi:Sämtliche Briefe auf CD-ROM, Hrsg. Pestalozzianum Zürich 1994.
(23)Tröhler,a.a.O.,S.69.
(24)Ebenda.
(25)Val. Neue Züricher Zeitung, Montag, 15. Januar 1996,Tages-Anzeiger,Montag,15.Januar 1996.拙稿「ペスタロッチー研究の新たなる地平」, 63ページ参照。
(26)Ebenda.同前書.
(27)Ebenda.同前書.
(28)Tröhler,a,a,O.,S.66.
(29)Ebenda.
(30)Ebenda.
(31)Vgl. A. Rang : Der politische Pestalozzi, Frankfurt.a.M.,1967.L.Froese und W.Klafki: Zur Diskussion:Der politische Pestalozzi, Weinheim und Basel,1972.宮崎俊明「ペスタロッチー研究の変遷と新動向」(日本教育学会編『教育学研究』第48巻第2号、1981年)。
(32)Vgl.Zeitschrift für Pädagogik,1994,Heft6, S.987.
(33)Vgl.Osterwalder,Pestalozzi-Die Wirkung

der Wirkunglosigkeit, S. 23. Ders, Zum 250. Geburtstag Pestalozzis-rationale Argumentation oder Kult des Pädagogischen (in:Zeitschrift für Pädagogik,1996,Heft2),S.149.

(34)Zeitschrift für Pädagogik,1996,Heft2,S.149.

(35)Vgl.Ebenda,SS.149-150.

(36)Vgl.Ebenda,S.149.

(37)Osterwalder,Pestalozzi-Die Wirkung der Wirkunglosigkeit,S.23.

(38)Ebenda,SS.23-24.

(39)Ebenda.S.24.

(40)Ebenda.

(41)benda.

(42)Ebenda,S.25.

(43)Ebenda,SS.24-25.

(44)Ebenda,S.25.

(45)Ebenda.

(46)Ebenda.

(47)Ebenda,S.26.

(48)Ebenda.

(49)Ebenda.

(50)Ebenda.

(51)Ebenda.

(52)ヘルヴェーチア協会はイーゼリンの主宰によって1760年に結成された自由主義者の集いである。ペスタロッチーは1774年に加入した。ヘルヴェーチア協会は一時休会していたが、1819年に再結成された。ペスタロッチーは1826年にこの協会の会長に推挙された。（Vgl.Handbuch der Schweizer Geschichte,2.Teil,Zürich,S.914.）

(53)Ebenda.

(54)Ebenda.

(55)Ebenda.

(56)Ebenda,S.27.

(57)Ebenda.

(58)Ebenda.

(59)Ebenda,S.28.

(60)Ebenda.

(61)Ebenda.

(62)Ebenda.

(63)Ebenda

(64)Peter Stadler : Pestalozzis Erziehug zur Politik（in:Schweizer Monatshefte,Zürich, 1996,3）S.22.